

売員をして今日に至っています。

今考えるに、あのような戦争の苦勞、そして六十有年の平和な尊い生活を、孫や末代まで受け継ぎ、語り継いでもらいたいと祈念するものです。

じつと眼を閉じると臉に浮かんで来るのは、あの時空爆や砲撃で、吹き飛ばされた戦友の姿です。

亡き英靈に合掌するばかりです。

## 松本、満州、トラック島戦記

長野県 中 塚 光 晴

私は大正十一（一九二二）年三月十日、長野県下伊那郡高森町の農家の後継ぎとして生を享けました。小学校高等科卒業後、青年学校での厳しい軍事教練の習得に努めました。このことが後の軍隊生活に大いに役立つこととなりました。

徴兵検査では連隊区司令官より甲種合格を申し渡され、昭和十八（一九四三）年一月十日、長野県松本の東部第五十部隊に入隊いたしました。そして土屋隊に所属して初年兵としての基礎教育を受けた次第です。

同年三月十五日前後ですが、夜間に松本駅より列車で出発、中央線を経由して下関に向かいました。そこで乗船、春三月とはいえ玄界灘は大荒れに荒れて、釜山港に上陸するまでは苦しい思いの連続でした。

三月二十二日、満州国稷穆にあつた関東軍の満州第八〇二部隊第二歩兵砲中隊に転属し、五月十日より行われた関東軍特別大演習、いわゆる「関東特演」に百万の精鋭部隊の現役兵の一員として勇躍参加し、四七速射砲の操作に精進いたしました。

昭和十三年の鮮満ソ国境での張鼓峯事変や、昭和十四年のノモンハン事変のこともありまして、当時の初年兵教育は厳格の一語に尽きました。思えば満州の冬季はマイナス三〇度にも達し、夜間の雪中行軍は身にこたえました。ようやくのこと目的地に着きますと野営地の設営です。先ず天幕を張り、その中央には炭火を起こし、それに不寝番、立哨勤務が待ち構えています。とくに歩兵砲中隊には軍馬も多く、軍馬のための飼葉やりや寝藁の取り替え、水やりなどもあつて目の回る明け暮れでした。

そのころ聞くところによりますと、松本から南方へ先遣された派遣部隊が大きな損害を受け、これを補充する部隊の話が諸々で交されるようにな

りました。

昭和十九年一月五日、関東軍司令官命にて南方戦線への出撃命令が下り、第三大隊と共に行動することになりました。そして一月九日、釜山港に集結し、そこで出港待ちとなりました。当時、すでに日本海方面海域には連日にわたつて米国潜水艦が出没しており、そのために出港が見合わせられたものでした。そしてようやく一月二十一日、釜山港を出発し、二月一日、船団は一端東京湾に集結し、ここで総数三十二隻の船団を組み、南方戦線に向けて出航となりました。

船団は二月二十日、トラック島の昭島港に入港、我々はここで上陸しました。そして三十二隻の船団はグアム島、ポナペ島へと分かれていきました。が、そのうちの三隻はほどなく敵潜に撃沈されてしまったということでした。

トラック島は十五の島からなっています。すなわち春、夏、秋、冬、月、火、水、木、金、土、日、松、竹、梅、桜の十五の文字を冠した名前の

島となっています。これらの島々は珊瑚礁に囲まれていて天然の要塞となっております。このため敵の軍艦は環礁の中までは入れませんので、環礁の外の外海から盛んに艦砲射撃を打ち込んでくるわけです。

話は違いますが、速射砲中隊長の秋山中尉殿は陸士出の方で優秀な軍人でした。敵機のグラマンやスピッドファイアーの空襲や機銃掃射、また艦砲射撃で、かなりの戦傷者が出た場合でも、よく部下の掌握に努め、そのかたわら精神訓話を交えるなどして、見事な部隊の統率を行っていました。戦場で怖いのは、敵の打ち込んでくる瞬発信管の弾丸です。これは空中でちよつとしたものに触れても頭上で爆発し、その破片は一面に飛散し、多数の負傷者が出ることとなります。

そのころ十日ばかりの秋島の軍務に服しました。昭和十九年三月二日、転属命令を受けました。それはトラック島夏島にある第三十二軍司令官菱倉俊三郎中将の元にある司令部要員となり、軍司令

部勤務となりました。この軍司令部には衛兵一個中隊が警備にあたっていました。本部は師団司令部、副官部、参謀部、兵器部それに軍医部の各部分から構成されておりました。

そのころ私も伍長に進級し、毎日の勤務は十五ある島々への連絡等の公用で、閣下の命令、師団司令部の通達などの伝達事項を通報する任務を負うことになりました。時には閣下の随員の一人として、参謀や将校、下士官と共に戦況の視察にも出かけました。

そのころですが、酒豪で鳴らした第三大隊の高橋大尉が行方不明となりました。また、海軍の連合艦隊司令長官山本五十六海軍大将が春島の飛行場から六機の護衛戦闘機と共に飛び立ちましたが、まもなく敵グラマンの猛襲を受けて搭乗機は被弾、撃墜されました。そしてご遺体は夏島に引き揚げられました。このことは正に痛恨の極みでありました。

「公用」の腕章をつけて春島に行く際に、閣下

から直に「体調はどうか」などと、一下士官である私にまで声掛けられるなど、よい將軍に仕えられたことを今でも誇りに思っています。

敵は夜間にもたびたび空襲を行ってきました。

我が方も高射砲で応戦し、グラマンを打ち落とすことが何度かありました。米機のパイロットは落下傘を着用して機外に飛び出して降下します。そして捕われたパイロットは後ろ手に縛られて閣下の前に引き出され、尋問を行った後、縄を解かれて一室に閉じ込めておきます。一週間ほどすると、敵の駆潜艇がきて、連れ帰ってゆきました。

やがて終戦を迎え、軍司令部、師団司令部の残務整理にあたりました。各島の兵員を優先に帰還の手続きを行いました。帰還する兵員の一人が「自分が帰国したら、あなたの家に連絡してあげるが、何か伝えることはないか」と言います。私はとっさに「自分は現地人と暮らすから心配しないでいい」と言う伝言を心にもなく頼み、その兵もまた、その通りに伝えたらしく、両親は困惑していたと

後日聞きました。

離島では我々が最後に残り、帰還待ちの日々を送りました。閣下は各兵士に、体は鍛えねばならないと、毎日の水泳をはじめ健康管理と健康維持に心配りされました。島には南と北に水道（環礁の切れ目）があり、船はここから出入りします。船を外海に出し、鰹釣りができました。砂浜には米を入れたドラム缶が転々と置かれていました。このように島では食料に困ることはありませんでした。

これらの処置は閣下の偉大な作戦、戦略によるもので、加えて部下には温情で接した。しかし規律は厳正に、人には博愛をもつてし、しかも作戦は緻密であるという、智・仁・勇を兼ね備えた猛将であったわけでは

戦後、今次大戦の各地の戦線・戦域で戦犯問題が起りましたが、当然、閣下には、この戦犯問題も何もなかったのです。

昭和二十一年二月十日、軍司令部、師団司令部

など、閣下以下二百人が最後にトラック島を後にし、二月十八日、神奈川県三浦の浦賀港に上陸しました。ここで検疫後、部隊は解散となり、二月二十三日に帰宅しました。両親は大変な喜びようでした。

現在、長男は家業の農業の後を継ぎ、次男は名古屋に、長姉は埼玉に在住して元気にしています。私は不運にも交通事故に巻き込まれ、脚部に傷を負い、少し歩行に支障をきたしておりますが、大事を取りながら、今なお頑張っております。

## 南方海上で六時間の漂流

長崎県 佐藤 義 教

私は大正十二（一九二三）年五月二十八日、長崎県南高来郡安中村（当時）の農家に、六人兄妹の長男として生を享けました。家業の農業の主たる仕事は煙草耕作業で、その合間に一本釣りの漁業も兼業しておりました。多忙な両親に育てられ、昭和十二（一九三七）年三月、安中尋常小学校を卒業し、上級学校への進学を両親にお願いしましたが、「子供が多く多忙できりぎり舞しているのに、お前が加勢してくれねばどうするか、すまんが進学はやめてくれ頼む」との両親の願いに断り切れず、農業の手伝いをすることにしました。その傍ら地元の青年学校に週二回午後から通学することになりました。

支那事変も激化し、昭和十六年十二月八日には太平洋戦争が勃発し、連戦連勝のニュースに血湧